

大学図書館におけるメディア・リテラシー育成のための  
映像制作プログラムの開発と評価  
Development and evaluation of a video production program  
for media literacy training in the university library

学籍番号：201521620

氏名：島田 貴司

Takashi SHIMADA

映像制作は制作者がどのような意図でどのようにメッセージを伝えるかを体験的に学ぶことができるため、メディア・リテラシー（メディアを主体的に読み解き、アクセス・活用し、コミュニケーションを創造する能力）育成に効果的であると期待されている。大学図書館は、情報リテラシーだけではなく、メディア・リテラシーの育成を支援することが求められているが、プログラムの検討は十分に行われていない。

そこで、本研究では、従来のメディア・リテラシーを育成する映像制作プログラムが長期に渡る点に着目し、大学図書館で、情報リテラシーのシナリオを組み込み、実習を重視した短期の映像制作プログラムを開発し、実践と評価を行うことを目的とした。

開発では、期間、学習内容、規模といった点を検討した。期間と規模は実施継続性の観点より検討し、学習内容は3件の先行実施例をベースに検討し、構成した。その結果、実習重視型のメディア・リテラシーを1日で学ぶ映像制作プログラムを開発した。

大学1～4年生20名に開発した映像制作プログラムを実施した。プログラムは3部（導入・実践・振り返り）で構成し、実践は、3人1組で撮影と演技を交代で行った。振り返りでは、予定より制作の時間がかかり、脚本の意図が十分に反映されない映像も見られた。

評価は、映像制作プログラム参加者と非参加者に質問紙への回答を求めた（参加者2種類、非参加者1種類）。参加者のみが回答した自由記述では、「映像メディアには制作者の意図が含まれる」といったメディア・リテラシーへの気づきが見られた。また、5つの観点（現在の知識・ここ1か月の意識・視聴観点・制作観点・学習項目）について、映像制作プログラム参加者・非参加者と質問紙の実施タイミング（映像制作プログラム実施前・後・1か月後実施）の2要因分散分析を行った結果、全ての観점에서交互作用が認められた。上記結果から参加者のメディア・リテラシー及び映像制作に関して、参加者のほうが非参加者よりもプログラム実施後や1か月後の得点が高いことが示された。

本研究の結果より、メディア・リテラシーの育成を目的とした短期間での映像制作プログラムが「制作者の視点」という点において効果的であったことが示唆された。

研究指導教員：西岡 貞一

副研究指導教員：鈴木 佳苗